

天上の礼拝・地上の礼拝（主に喜ばれる賛美2）

1. 地上の礼拝は、天上の礼拝の写しと影
2. 神への礼拝賛美は、神を見ること－聖なる者として
3. 神の栄光を反映させる

1. 地上の礼拝は、天上の礼拝の写しと影

皆さんは、神に捧げる最もふさわしい礼拝は、どのような礼拝だと思われるでしょうか？

ヘブル人への手紙8:5

その人たち（幕屋で使える祭司たち）は、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。「よく注意しなさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい。

ここから分かるのは、モーセが建てた幕屋は、天にあるものの写しと影であるということです。そして、神は、礼拝に関するさまざまな規定を与えられました。神を礼拝する建物（幕屋、その後は、ソロモンが建てた神殿）が天の写しと影であるなら、そこでささげられる礼拝も当然ながら、天の礼拝の映しと影でなければなりません。ここから、私たちの求めるべき地上の礼拝とは、天上の礼拝と一体となることであると私は思っています。

イザヤ書6章には、天上の礼拝の様子が書かれています。

（必要であれば説明する）【イザヤ】伝承によれば、ユダの王アマツヤの兄弟、ウジヤ王のいとこ。それが本当であれば、彼は預言者として、直接王たちに忠告や助言を与える立場にあった。彼はウジヤが死んだ年（前742年頃）に召命を受け、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤ、マナセまで、約50年もの間、預言者として活動した。預言する能力を持つ妻と少なくとも2人の子がいた。（参：アッシリア捕囚 前740年頃、バビロン捕囚 前597年頃）

イザヤ6:1-4

6:1 ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。そのすそは神殿に満ち、

6:2 セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、

6:3 互いに呼びかわして言っていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。その栄光は全地に満つ。」

6:4 その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。



1. イザヤは、ある日、神殿で礼拝をささげていた時に、天上の礼拝の様子を目の当たりにした。そこには、高くあげられた王座に座す主がおられた。（1節）
2. 王座に座しておられる主のすそが、イザヤが礼拝していた神殿にまで届き、そこに満ちていた。（1節）⇒主のすそが神殿にまで満ちていたということは、天の礼拝と地上の礼拝が繋がられているということではないだろうか？
3. その上には、セラフィム（「燃え盛るもの」という意味）が立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔を覆い、二つで両足を覆い、二つの翼で飛んでおり、互いにこう呼び交わしていた。「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ。」（2,3節）
4. その叫ぶ者の声のために、神殿の敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。（4節）

これが、旧約聖書に書かれている天上の礼拝の様子です。

2. 神への礼拝賛美は、神を見ること — 聖なる者として —

私たちの多くは、多分、預言者イザヤのように肉の目で天上に座しておられる神を見ることは出来ないと思います。でも、私たちは、みことばを通して神を知り、霊の目で神を見、その素晴らしさをほめたたえます。しかし、私たちが聖でなければ、神を見ることができません。

ヘブル人への手紙12:14

聖くなければ、だれも主を見ることはできません。

「聖」の意味は、「分離」です。主を見るために「聖くなる」とは、この世から分離して、神の領域に分け入れられることです。

コリント人への手紙 第二 6:13-18

6:13 私は自分の子どもに対するように言います。それに報いて、あなたがたのほうでも心を広くしてください。

6:14 不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはいけません。正義と不法とに、どんなつながりがあるでしょう。光と暗やみとに、どんな交わりがあるでしょう。

6:15 キリストとベリアルとに、何の調和があるでしょう。信者と不信者とに、何のかかわりがあるでしょう。

6:16 神の宮と偶像とに、何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神はこう言われました。「わたしは彼らの間に住み、また歩む。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。

6:17 それゆえ、彼らの中から出て行き、彼らと分離せよ、と主は言われる。汚れたものに触れないようにせよ。そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、

6:18 わたしはあなたがたの父となり、あなたがたはわたしの息子、娘となる、と全能の主が言われる。」

もう一度言いますが、「分離する」とは、この世から出て行き、神の領域に入れられることです。しかし、聖書の中で言う「この世から出る」という意味は、「この世界から出て行く」ということではありません。

コリント人への手紙 第一5:9-10でパウロはこう語っています。

以前、教会の中で不品行を行っている者たちと交際しないようにと書いたが、それは、世の中の不品行な者、貪欲な者、略奪する者と全然交際しないようにという意味ではない。もしそうだとすれば、この世界から出て行かなければならないでしょう。

「この世から出る」「この世から分離する」ことに関して、旧約でも新約でも最も強調されているのは、偶像礼拝を避けることです。ほんとうは、主（YHWH）以外の神はいません。しかし、神々と呼ばれるものはたくさんあります。実際には、その偶像の神々とは悪霊なのだパウロは語っています。

コリント人への手紙 第一10:19-21

10:19 私は何を言おうとしているのでしょうか。偶像の神にささげた肉に、何か意味があるとか、偶像の神に真実な意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。

10:20 いや、彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。

10:21 あなたがたが主の杯を飲んだうえ、さらに悪霊の杯を飲むことは、できないことです。主の食卓にあずかったうえ、さらに悪霊の食卓にあずかることはできないことです。

敵であるサタンは自分の手下である悪霊を使って、日本だけでなく世界中に、偶像礼拝につながるさまざまな種類の宗教を作り、その神々を拝ませ、人々がまことの神を礼拝しないように策略を練ってきました。だから、そのような神々を拝む礼拝行為と少しでも行動を共にするなら（1コリント 10:19-21では、パウロは、神々の祭壇にささげられた供え物を食べるなら、その祭壇にあずかるこ

とになるのだ、と言っている。つまり、彼らと共にその供え物を食するなら、その神々を礼拝することになってしまう）、私たちは、その人たちが負っているくびきを負う事になります。私たちが負うくびきは、イエス・キリストの自由のくびきでなければなりません。だからパウロは、さきほどお読みした、**コリント人への手紙第2章14節**で「**不信者と、つり合わぬくびきをいっしょにつけてはなりません**」と語ったのです。真実の神以外の神々を礼拝するなら、私たちは悪霊の影響を受け、しまいには神から心が離れて行くのです。**コリント人への手紙第2章17節**にある「**汚れたものに触れないようにせよ**」の「**汚れたもの**」とは、悪霊的な影響を受けたものです。だから、神は、その「**汚れたものに触れないようにせよ**」、「**そうすれば、わたしはあなたがたを受け入れ、わたしはあなたがたの父となり、あなたがたは私の息子、娘となる**」とおっしゃいました。

神は聖なるお方なので、聖でないもの、つまり、汚れたものに触れることができないからです。ですから、神は、「**わたしが聖であるから、あなたがたも、聖でなければならない。**」（**1ペテロ1:16、レビ記11:44**）と言われたのです。

神は、偶像礼拝について、旧約の律法でも真っ先に語ってきました。神がモーセを通して民に与えた十戒の最初は、「**あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。**」（**出エジプト記20:3**）です。そして、十戒の中で最も長いのが、偶像礼拝に関する第二の戒めで、これが、3節にも及んでいます。

出エジプト記20:4-6

20:4 あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。

20:5 それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、【主】であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、

20:6 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。

偶像礼拝に関して、神が十戒の中でこれほど長く説明したのは、偶像礼拝が、私たちが神から引き離す最も危険な罪であるからです。言い換えれば、これが神に敵対するサタン、あるいは、サタンの手下どもの悪霊たちを拝むことであるからです。サタンと悪霊は汚れていますから、それらを礼拝すると、私たちは汚れてしまいます。そうすると、神は、もはや私たちと交わりを持つことが出来なくなります。

だから、私たちは偶像礼拝を避けなければなりません。もし信仰者が偶像礼拝をしてきたのであれば、また、今も偶像礼拝を続けているのなら、悔い改めてそれを断ち切るなら、私たちは、この世の父であり、この世を支配しているサタンの力から解放されます。解放してくださるのは、イエス・キリストです。

コロサイ人への手紙1:13

神は、私たちが暗闇の圧制から救い出して、愛する御子のご支配に移してくださいました。

そうやって、やっと私たちはイエスさまのご支配の領域に移され、聖霊に導かれてキリストのいのちに生きる生き方へと導かれて行くのだと思います。また、主に示されて、ある種の職業を離れたり、ある友人関係を断ち切ったり、主に喜ばれないものを捨てたり、ということにも導かれて行くことでしょう。

神を慕い求めているのに、何故かなかなか成長できないクリスチャンがいます。自分がそうだと思う方は、まず、自分の立ち位置を吟味されることをお勧めします。偶像礼拝を続けていないか、この世にまだ片足をつっこんでいないかどうか。片足を神の領域に入れ、片足がまだこの世にあるなら、その人は思うように歩くことができないのです。

実は、私こそそのような者でした。イエス・キリストを救い主として信じ、片足を神の領域に入れたものの、もう片方の足はまだしっかりこの世に付けたままでした。なかなか思うように歩けず、ついに大きな罪に陥って、倒れてしまいました。その後、悔恨の思いで一杯になり、心が砕かれて、毎日むさぼるように聖書を読みました。そして**ガラテヤ人への手紙5:17,18**を読んだときに、どうして自分がなかなか成長できなかったのか、どうして小さな罪を断ち切ることができなかったのか、そして、どうしてついには大きな罪に陥ってしまったのか、分かったのです。

ガラテヤ人への手紙5:17,18

5:17 なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。

5:18 しかし、御霊によって導かれるなら、あなたがたは律法の下にはいません。

ここでは、「肉」と「御霊」の対立が語られていますが、「この世」は「肉」に直結するものであり、「この世」も「肉」も神に敵対するものです。そのことを、私は転倒して、初めて気づかされました。そして、以来、この**ガラテヤ人への手紙5:17,18**と共に、同じく**5章1節**で語られている

「キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。」というみことばを、心にしっかり刻んで生きるようになりました。

そして、私が神よりも大切なものとして、偶像礼拝として拝んでいたいくつかのものから離れました。最初は、私の身が引きちぎられるような思いで涙が出ましたが、捨てた後には、捨てる前には全く想像もできなかった、信じられないような解放感を味わいました。私の霊的解放と霊的成長は、この時から始まったと思います。

3. 神の栄光を反映させる

私たちの霊とたましいと体がこの世から分離されて、神の領域に入れられるとき、私たちは、初めて神の栄光を反映させることができるようになります。モーセは、シナイ山で、顔と顔を合わせて、神と話しました。そのモーセの顔は、神の栄光を反映して光を放ち、イスラエル人でさえ、彼の顔

を見つめることができないほどでありました。私たちも、彼のように栄光を反映させていただける者であることを、パウロはこのように語っています。

コリント人への手紙 第二3:16-18

3:16 しかし、人が主に向くなら、そのおおいを取り除かれるのです。

3:17 主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。

3:18 私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

モーセの時代には、特別な人にしか聖霊は与えられませんでした。しかし、新しい契約の時代に入ると、イエスを信じるすべての者に聖霊が与えられるようになりました。私たちの体が神の神殿であり、そこに神の霊が宿ってくださいます。だから、神が聖であるように、私たちも聖とならなければならないのです。私たちの内に神の霊が宿ってくださるのは、父なる神と子なるイエス・キリストが私たちと共にいてくださるためであり、また共同体（教会）として、ともにイエスのみからだを立て上げるためです。主の御顔を仰ぎながら歩むとき、私たちは、主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿が変えられて行くのです。これが、私たちの内に内住される聖霊の働きです。何と素晴らしいことではありませんか！

さて、ここで、礼拝の中に含まれる賛美についてお話させていただきたいと思います。

（例話1）

10年ほど前、日本で、ある牧師のお嬢さんAさんが、コンサートの伴奏をしてくださいました。Aさんのお母さんは、彼女に音楽の才能があるのを見て、小学生の時、ある音大の先生のところに連れて行きました。音大の先生は、Aちゃんにこう尋ねました。「Aちゃんの目標は、音大に入ること？それとも趣味で弾くこと？」そうしましたら、お母さんが、すかさずこう言ったそうです。「先生、音大レベルじゃ困るんです。この子は神のためにピアノを弾くんですから。天国レベルじゃないと困るんです」。その時、ピアノの先生の目はテンになったそうです。

（例話2）

また私ごとですが、昔私がレッスンを受けていたドイツの音楽の先生は、ユダヤ人でした。ユダヤ人の彼は、キリストが神の御子であることは否定していました。けれども宗教曲に関しては別でした。彼は、特にバッハの曲を心から愛し、いつも時間をかけてレッスンしてくださいました。しかし、レッスンでは、20点、30点、良くて40点という低い評価しかいただけませんでした。ところがある日、「今日のAtsukoの歌は70点！」と言ってくくださったのです。彼はこう説明しました。「こ

れまでは、Atsukoが大きく見えていた、しかし、今日は、やっと神がAtsukoより大きく見えるようになった。」

あの時期、私にとって自我が砕かれる出来事があり、心が萎えていた時でした。その時、私が神を証する歌を歌うには、もっともっと自我が砕かれて、私の姿が小さくなり、神のお姿が大きくならなければならないのだ、ということを知りました。まさしく、バプテスマのヨハネが、**ヨハネ 3:30**で「**あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。**」と言ったようにです。

以来、私が目指す賛美は、天国レベルのものになりました。つまり、私が見えなくなって、神が見える歌唱をするということです。

ですから、「聖」とされて賛美をするなら、コンサートや人前で賛美リードをするのでない限り、音痴でもよいのです。逆に、音楽的素養があまりない人の方が、神を心からほめたたえることが多いことを私は体験してきました。例えば、私たちのドイツの教会は、三分の一が音痴（正しい音が取れない人たち）なのですが、その人たちの賛美の方が、心がこもっているんです。音がずれていても、聞いていると感動するんです。決して音楽教育を受けて来た人（自分を含めて）を否定する訳ではないのですが、どうも、私たちの内には、正確な音で歌わなければならない、きちんと演奏しなければならない、きれいな声で歌わなければならない、などと言うことに神経を使うことが多くなりがちです。ですから、音楽教育を受けた人ほど、心して主をほめたたえることを第一として行かねばならないと思っています。

神は私たちを聖とするために（この世から分離して、神の領域に分け入れるために）、御子キリスト・イエスを世に送り、激しい御苦しみのうちに流された尊い血潮をもって、私たちを、神を礼拝する民の中に加えてくださいました。ですから、私たちは、だれも神の恵みから落ちることのないように、信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないで歩もうではありませんか。

もし、私たちが世の誘惑に負けて罪を犯したなら、とりなしてくださるお方がいます。イエス・キリストです。そして、**ヨハネの手紙 第一1章9節**にはこう書いてあります。

もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

そして、私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのですから、かの日を待ち望みつつ、**ヘブル人への手紙13章15節**にあるように、「**ですから、キリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげて行こうではありませんか！**」

いよいよメシア王国が到来する時には、天のみ使いやキリストの救いに入れられた私たちだけでなく、被造物のすべてが神を賛美する様子が書かれています。それは、アダムの原罪によって、人間だけでなく、被造物全体が滅びに入れられてしまったからです。しかし、天の御国では、被造物自

体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられると、[ローマ人への手紙8章19-21節](#)に書かれています。

8:19 被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。

8:20 それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。

8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。

(まとめ)

今日は、「天上の礼拝、地上の礼拝」というテーマで、3つのポイントからお話しさせていただきました。

1つ目のポイントは、「地上の礼拝は、天上の写しと影」であること。そこから、私たちの求める地上の礼拝は、天上の礼拝と一体となることであることを学びました。

2つ目のポイントは、「神への礼拝賛美は、神を見ること」であること。聖なる神を見るためには、私たちも聖とならなければならないこと。そのために、この世から離れて神の領域に入れられること、特に大切なのは、偶像礼拝を避けることであることを学びました。

3つ目のポイントは、「神の栄光を反映させるもの」であること。天上の礼拝と一体となることを求め、そのために聖とされて神の御顔を拝して行くなら、私たちは、神の栄光を反映する者と変えられて行きます。

そうやって生きる時、私たちの地上の礼拝賛美は、日ごとに天の礼拝に近づき、また一体とされて行くのだと思います。私たちが地上の生涯を終え、天の御国で主にまみえる時、一点も恥じることのない者として立たせていただき、待ち焦がれていた天の礼拝に加えていただきたいと願っています。

最後に、天と地のつくられたものすべてが神をほめたたえる光景が書かれている、[ヨハネの黙示録5章11節～14節](#)をお読みして、私の奨励の最後とさせていただきたいと思います。

5:11 また私は見た。私は、御座と生き物と長老たちとの回りに、多くの御使いたちの声を聞いた。その数は万の幾万倍、千の幾千倍であった。

5:12 彼らは大声で言った。「ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。」

5:13 また私は、天と地と、地の下と、海の上のあらゆる造られたもの、およびその中にある生き物がこう言うのを聞いた。「御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。」

5:14 また、四つの生き物はアーメンと言い、長老たちはひれ伏して拝んだ。